

## はじめに

二〇二二年(令和四)十二月十日に開催された第九回高麗郡建郡歴史シンポジウムで、渤海史研究の二大泰斗である小嶋芳孝氏(考古学)と古畑徹氏(文献学)をお迎えし、講演とパネルディスカッションを行った。本書は、お二人を中心に、渤海と日本の交渉や渤海社会に関する新進気鋭の研究者の論考を一冊にまとめたものである。また、高志書院から出版されている古代渡来文化研究シリーズの四冊目でもある。以下、本書の概要を示すこととする。

第一部「渤海社会の実像」では、寺院建築・墳墓・装身具・一般建築物などのハード面と、対中国・対日本外交で活躍した渤海人についてその特徴を析出し、渤海社会の実像を考察する論考を収めた。

小嶋芳孝「第一次遣渤海使が目撃した渤海の旧国」は、渤海が日本に使節を派遣した背景や引田虫麻呂たちが渤海滞在中に訪問した当時の渤海の王都を検討する。帰国後、虫麻呂らが朝廷に報告した唐の北方政策や黒水靺鞨など靺鞨諸部や新羅の最新情報は、その後の外交政策に大きな影響を与えた。虫麻呂らは四方陀子寺址や八連城の造営開始直前の様子を目にしたなどと指摘する。

中澤寛将「渤海の文化変容と地域社会」は、渤海以降に顕著になる石室墓・腰帯具・炕付き平地建物には、伝統的な「靺鞨」や「高句麗」の要素や、唐をはじめ外来文化の影響が認められるが、その成立・展開の背景として、渤海王権が多様な靺鞨諸集団を統合する上で、伝統的な生活や風習を認めながら支配下に組み込んでいたことが看取でき

ると結論づけた。

古畑徹「渤海国の高氏について―渤海国の対外政策と関連させて―」は、渤海使等で来日した渤海人で名前の分かる者に関して、高氏の二八名をはじめとする諸氏族が確認されるのに対し、王族の大氏は一名しかいない理由を考究する。その結果、渤海国を靺鞨の一種と位置づけて冊封した唐と、高句麗後継の朝貢国と見なした日本の両方に対応した外交を展開するための渤海国の外交戦略によるものとの結論を導き出した。

澤本光弘「高麗郡と契丹による渤海攻略とはさま―渤海滅亡と東丹国成立の記事をてがかりにして―」は、渤海の滅亡にいたる情勢を追跡する。『遼史』耶律羽之伝に「渤海の内紛」を示唆する記述はないとし、契丹が季節移動により、極寒期に渤海領域に近接して越冬することが、渤海との摩擦になりうると指摘する。渤海滅亡に関する『将門記』の記述は裴瑋がもたらした情報とみなす余地があるとする。

第2部「古代日本と渤海」では、渤海と日本の間を往来した外交使節、交わされた外交文書、両国で活躍した高句麗系氏族に関する論考四編とコラム三編を収めた。

大日方克己「渤海からの到着地と京への道―列島交通体系のなかで―」は、渤海使の到着地と交通の関係を考察する。九世紀後半～十世紀前半、加賀国・出雲国への来着がなくなり、伯耆・若狭・丹後など東に移つていき、十世紀後半以降に若狭・敦賀へと宋人の来航が集中していく傾向は、北陸・山陰から京に向かう水運が敦賀・若狭に集約されていく海上交通の展開にも対応するものとする。東シナ海も視野に入れた日本海上交通体系全体の変化に対応するものとして位置づけていく必要があると強調する。

浜田久美子「渤海使の入京路―穴太遺跡・畝田ナベタ遺跡・鳥羽遺跡の帯金具に注目して―」は、穴太遺跡(滋賀県大津市)・畝田ナベタ遺跡(石川県金沢市)・鳥羽遺跡(群馬県前橋市)の三遺跡から出土した帯金具に注目する。穴太

遺跡で発見された金銅製帯金具表面の忍冬唐草文が韓国济州島龍潭洞遺跡出土の帯金具と酷似していることや、花文帯金具が渤海・契丹に多いとされることなどから、北陸道で発見された帯金具は、来日した渤海使が身に着けていたり、迎接した日本側官人に個人的に贈られた物が境界祭祀の料物として使用されたものと推測する。

小嶋芳孝「古代加賀の港湾遺跡」(コラム)は、渤海使節が上陸した津湊や、使節を安置した「便処」として利用された可能性のある金沢市周辺の五つの遺跡を紹介する。金石本町遺跡は湊に関係する性格を持っており、畝田寺中遺跡は八世紀代の加賀郡津で、周辺遺跡群と共に遣渤海使や渤海使節が滞在して利用したと推定する。戸水C遺跡を加賀立国に伴って設置された国府津に比定し、戸水大西遺跡・畝田ナベタ遺跡は渤海使節を安置する「便処」として使用されたとする。

柿沼亮介「高麗朝臣一族の改姓と渤海」は、高麗朝臣一族の改姓や遣外使節への任用について、渡来系氏族への賜姓のあり方や奈良時代の内政と外交を踏まえながら再検討することで、律令国家が渤海とどのように向き合ったかを考える。高麗王氏や百濟王氏などの存在は、日本を中華とする「帝国」型国家構造を希求する意味があったうえで、「高麗王氏」「肖奈王」「高麗朝臣」などの改賜姓の史的意義を分析し、唐による渤海の冊封と矛盾しない範囲で、高句麗系の貴族を日本が臣下に行っていることを東アジア諸国に対して喧伝する目的があったとする。

須田勉「高麗郡高岡廃寺第2建物と渤海の墓上建物」(コラム)は、高岡廃寺第2建物の墳墓を火葬後の埋葬施設にともなう墓上建物と想定したうえで、七世紀末から八世紀第3四半期頃の造営と推定される吉林省敦化市にある六頂山第一墓区M3号墓と比較し、規模や構造上の質において相違点を認めながらも、墳墓としての構成要素が多く、点で共通することを確認する。

中野高行「渤海国書をめぐる諸課題」は、日本と渤海間で交わされた国書に注目し、正式な国書である渤海国王啓の発給が記録に見えない事例を検討したうえで、渤海王が発給した国書をめぐる諸課題を提示する。

荒井秀規「高句麗・渤海と豉」（コラム）は、高句麗にルーツを持つ古代武蔵国の特産品である豉くきについて解説する。豉の製法に日本独自の過程が加えられたことを推測し、葉としての豉や豉の製造場所について詳述する。高麗郡家関連遺跡である埼玉県日高市高萩の拾石遺跡から「厨」の墨書土器が出土していることから、近辺に郡厨があつたと考えられていることや、今日の埼玉県比企地域でも、鳩山町・小川町・嵐山町を中心に豆腐・味噌・醤油となる大豆栽培が盛んであることなどを紹介する。

高句麗滅亡後に、ほぼ同じ版図に高句麗遺民を含んで建国された渤海を分析するこれら諸論考は、高麗郡に関する新たな視角を提供しているものと考ええる。

二〇二四年七月一日

中野 高行